

地域情報（県別）

【福岡】「コミュニティ・クリニック化は最強のマーケティング」医師教育や地域活動も展開-今立俊輔・今立内科クリニック副院長に聞く◆Vol.3

2023年4月7日（金）配信 m3.com地域版

幅広く診療し、入院医療や在宅医療も提供する「今立内科クリニック」（久留米市）は、「コミュニティ・クリニック」をテーマに医師教育や地域活動も行う。久留米大学と国立病院機構長崎医療センターの連携施設として機能し、地域に向けては各種イベントや在宅医療に関わる多職種の勉強会を開催してきた。「コミュニティ・クリニックは社会貢献だけでなく、最強のマーケティングでもある」。今立俊輔副院長はこう実感を話す。（2023年3月2日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第2回は[こちら](#)



今立俊輔氏（本人提供）

——過去の取材記事によると、今立内科クリニックは医師の教育にも取り組んでいるそうですね。

医学生と研修医（旧初期研修医）、総合診療専門医を目指す専攻医（旧後期研修医）の教育に取り組んでいます。「教育も担おう」と意識したのは、2016年の在宅診療部立ち上げのころです。2018年に新専門医制度が始まり、これに合わせて新しい専門医として総合診療専門医が加わることを知った私と常勤医の江口先生（詳細はVol.1を参照）は、「地域のかかりつけ医として医療提供するには総合診療医が増え、各地で活躍するようになるのが望ましいだろう」と考えました。

すると、ちょうど2016年4月に私の母校でもある久留米大学に総合診療科が開設されることになり、縁あって当院が教育連携施設になりました。2017年に同大の医学生を受け入れ、続いて2018年には同大の総合診療専門研修プログラムの連携施設になりました。さらに、2021年には私が初期研修を受けた国立病院機構長崎医療センター総合診療科の同プログラムの連携施設にもなりました。

——同院は在宅医療や地域活動も行っているのですが、こうした特性が地域医療の担い手育成に寄与しそうです。

私たちが育てたいのは、単に臓器を広く診られるだけでなく、患者さん個々の生活背景や人生にも寄り添える医師です。在宅医療の対象となる末期がんの患者さんは心理的・社会的な背景も踏まえて治療プランを考える必要があります。また、医療を俯瞰して地域という「面」で捉えるためには、医療機関の外に出て住民と交流するのはとても大切なことだと思います。診療外での雑談を重ねるうち、ふとしたときに地域に求められるニーズが見つかることもあります。

教育を担うことは診療にもプラスに働いています。専攻医が加わることにより、在宅診療部は2018年から4～5人のグループ診療体制を取ることができ、医師のワークライフバランスも配慮しやすくなりました。2022年度は研修する専攻医がいませんが、過去に専攻医として当院で学んだ医師が現在、非常勤医として在籍しています。将来的にまた専攻医が来る予定もあり、クリニックのマンパワーを増やす意味でも良い影響があります。

——**学生や医師の教育にも寄与しているという地域活動ですが、具体的にはどんなことを行ってきたのですか。**

始まりは院内での食事会でした。地域の人から相談を受け、高齢の人の個食を減らそうと開催し、以来、複数の取り組みを行ってきました。「いまここかふえ」と題して自治会の集会所で食事会や健康講座を開いたり、「いまここ演芸場」の名で芸人による落語や人形浄瑠璃などの観賞会を院内で行ったりしました。在宅医療の質向上を図ろうと、地域の多職種が集まる勉強会も開きました。

こうした活動を新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行する2020年まで定期的に行いました。以後は感染リスクを減らすために中止しましたが、2023年4月には再開する予定です。新たな構想として、高齢者が多い団地に交流拠点を設けられないか検討しています。



地域向けイベント「いまここ演芸場」の様子（本人提供）

——**「やみくもに在宅医療を推進するのではなく、選択肢の一つとして住民に受け入れられるよう発信したい」。先述の記事に活動の思いがこう書かれており、印象に残りました。**

私たち医師は影響力が大きすぎるのですよね。多くの患者さんやご家族は医師の発言に影響を受け、その内容でどうするか迷うことが少なくありません。その意味で、当院では患者さんやご家族の価値観を尊重して話し合いを重ねるACP（アドバンス・ケア・プランニング）を大切にしており、過去が多職種勉強会ではこれをテーマにしたこともありました。

地域活動を行う意図の一つに、継続的な発信によって患者さんやご家族の意思決定をサポートしたい思いもあります。私たちが本当の意味で白衣を脱ぐのは難しいものです。たとえ患者さんやご家族の心理面に配慮して物理的に白衣を脱いだとしても、当事者からすると「医者」である認識は変わらないでしょう。しかし、発信の場が院内ではなく患者さんやご家族、地域の方の生活の場であればどうでしょうか。もしかしたら受け入れてもらいやすいかもしれません。「医療じゃないところにいろんな球を投げてみる」。そんなイメージで地域活動を行っています。

——**在宅医療を含めて幅広く診療し、医師の教育も担いつつ地域交流も図る。コミュニティ・クリニックをテーマに活動を続けられる原動力に興味があります。**

一言で伝えるのは難しいのですが、当院の歴史や私の経験が絡み合っているのではないのでしょうか。今立内科クリニックは長く地域の人から親しまれており、私も子どものころからそれを肌で感じてきました。当院は「いまだち」ですが、いつの間にか「いまだてさん」の愛称がついて、「いまだてさん」「いまだてさん」と呼ばれるようになったんですね。「何かあればいまだてさんのところに行く」。そんなブランドを引き継ぎたい思いがあります。ほかにも、学生時代に東南アジアや沖縄の離島を旅するなかで人と人との関わり合いに魅了され、長崎の離島診療所時代にコミュニティの中で暮らすことを経験したのも大きいです。

「使命感」と言いすぎかもしれませんが、地域医療を担う者として、コミュニティ・クリニックを目指すことは社会から託されていることのような気がしています。意図的ではありませんが、ビジネス面でも有効ではないでしょうか。患者さんは一般的に、何か悩みや痛みがないとクリニックには来ないので、こちらから地域に足を運べば一つのマーケティング活動になりますし、学生や医師の教育もクリニックのマンパワーを高めることに寄与します。私は過去、経営学を学んでMBA（経営学修士）を取得しました。個人的には、「コミュニティ・クリニック推進は最強のマーケティング」だと感じています。

◆今立 俊輔（いまだち・しゅんすけ）氏

2005年久留米大学医学部卒。国立病院機構長崎医療センターや五島列島の小値賀島にある小値賀町国民健康保険診療所の勤務などを経て、2016年に祖父の代から続く今立内科クリニックに加入、在宅診療部を立ち上げる。日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医・指導医。経営学修士（MBA）。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

